

## 第四章 心の実相

今までに「統一的主体」としての自己があるということを御一緒に段々と考えてまいりました。それでも、この統一的主体としての自己があるということに就いては、もう皆さんもなたも御異存のないものと思います。それでも、そこまでの所は御異存のないものとして、少しその先に進みたいと思います。それはその統一的主体としての自己、見る主、聞く主としての自己が何処どこにあつて、どういう様子をしているのかということ、これから皆様と御一緒に事実と首つ引きで考えて行きたいと思ひます。事実と離れては空論になります。でありますから、どうか私が「私の方を見て頂きとうございます」と申しましたら、本当に私の方を見て頂きとうございます。「そんなもの見なくても、分かっている」とおっしゃる方は、きつと分らない方があります。ですからどうか今日は一年生になつたおつもりで先生の言う事をよく聞いて頂きとうございます。そして見る主、聞く主としての自己とはこれだ、此処ここにあるということをしかと突きとめて頂

きたいと思えます。

## 一 心の所在・心の様相

そういたしますと第一段といたしまして、心に就いて考えていきとうございます。私共が種々なるものを知るといふのは心に覚るのであります。心が種々なるもの覚るものであります。覚るとは心のことであります。ですから私共が見る主、聞く主を突き止めるには、まず心の所在ありかを知らねばなりません。

皆様の心は一体何処にございませうか。どうぞ私の顔を見て頂きとうございます。いかがでありますしうか。私の顔は皆様がそちらにあつて透き通つた明るみを通してこちらにマザマザと見えております。この顔が皆様の心でありますと申しましたら、皆様はなんとおっしゃいませうか。

皆様は眼がありますから、物を見るところでできます。もしも物を見るところでできなければ盲人であります。けれども、皆様は眼がありますから、物を見るところでできます。この見るところは、眼が見るのでありますしうか、心が見るのでありますしうか。「見る」という事は言葉であります。けれども、その事実を考えて頂きとうございます。「手を挙げる」ということは名前であります。けれども、その事実（手をお挙げになつて）こういう事でありませうか。そのように見るところは言葉であります。けれども、その言葉の指し示す事実をよく考えて頂きとうございます。

私共が友達の事を思ひます時、友達の顔が覚ります。お母さんの顔を思ひます時、お母さんの顔が覚ります。それは心であるといふことはどなたも御異存ない事と思ひます。お母さんの顔を思ひます時、心に顔が

見えるということは、知るということであります。顔があるということは、すなわち知るということであります。知るといふことなくしては何も覚りはいたしません。私共がこの黒板を見ることがはかくのごとき色形を知ることあります。その言葉の指し示す事実は知るといふことであります。知るといふことなくして何も見えも聞こえもいたしません。もつとも物理学的に紫という色があります時は、きつとそこに七百兆回の振動があります。このような物理学上のことはあります。けれどもまず最初に紫の色を見ます時は、その色を知るのであります。ですから見る事、聞く事は心のすることであります。

「心此処にあらざれば、見れども視えず、聞けども聴こえず」と申します。ですから物を見るといふのはこの眼が見るのではありません。心が見るのであります。ですからまずその心の所在を知る必要があります。

サア、どうぞ此方を見て頂きとうございます。この笹本が皆様の心であると申しましたら何とお考えになりますでしょうか、と先程申しましたが、皆様の中には「なにこの笹本が我々の心？ そんな事があるものですか。私共の心は私共の頭の中にあります」とおっしゃいますでしょうか。昔でありますならば心は腹の中にあるとか、胸の中にあるとも言ったであります。今日では段々出世して心は頭の中にあると申します。「どうもあの人は腹黒い人だ」などと申しまして、腹黒いとは心の善くない人のことを申します。ですから昔は心は腹の中にあると考えておったのであります。また「それでは私の胸が済みません」などと申しますように、心が胸の中にあると考えた時代もあります。

今日では皆、心は頭の中にあると思っております。「あなたの顔は私共の外にあるではありませんか。しかもあなたは物質ではありませんか。色であり有形ではありませんか。それがどうして心であつてたまるもの

か」とおっしゃいますでしょうか。「私共の心は無形であつて、私共の頭の中にある。物質とは別である」とおっしゃいますでしょうか。

また私共は普通こう考えています。旅行などに行きますと、処々方々の記憶が頭の中にできます。すなわちその精神的写真が神経細胞の中にできて、身体と共にどこまでも持つて行くことができると考えています。例えば京都へ帰つて来て、日光の陽明門を思い出して美術の極致だなどと言つて思い出す事ができます。華嚴の瀧の音の精神的写真が頭の中にできて、身体と一緒に京都に持つて帰つて、再びそれを思い出す事ができるとします。

「頭の中に思い出す事ができる種々のもの、華嚴の瀧の音も、陽明門も、それは心だが、あなたの顔が心であつてたまるものか」と皆さんは申すでしょう。あるいは「この顔が皆さんのお心です」と言いますと、皆さんは「学者は大脳皮質が精神の座所だと言つてゐるではないか」と申すでありましょう。そうおっしゃるものとして、皆様にお尋ねいたします。

皆様は夢を御覧になるであります。もつとも「聖人に夢なし」と申しますから、あるいは失礼な申し分であるかも知れません。けれども、どうぞ、そのお方は以前に夢を見た時の事を思い出して頂きとうございます。私共は夢を見た事があります。夢の中でお母さんと話をしております時には、自分はこちらにあつて透き通つた明るみを隔ててあちらにお母さんを見ております。アノ、皆様の中には自分の居ない夢を御覧になつた方がおいでになるでしょうか。そんな事はありませんですナ。夢の中にはきつと自分がおります。自分の居ない夢はありません。夢の中で見たり聞いたりしますのは、皆自分が主人公で見たり聞いたりする

のであります。夢の中でお母さんと話します時に、やはり自分があつて透き通つた明るみを隔てて、こちらにお母さんの顔が見えております。そして、その口元の所に声を聞くのであります。

夢の中のお母さんの顔と、実物のお母さんの顔とは違つておりましようか。夢の中で見るお母さんは煙のようであつぱけだとおつしやいまいましようか。そんな事はありませんですナ。夢の中で見るお母さんはやはり色であり有形であります。夢の中で見るお母さんは、現実で見るお母さんと少しも違いありません。もしも違ふのでありますならば、「今は夢で見るお母さんであつて、現実で見るお母さんとは少し違ふ」などと考えるはずであります。けれども現実で見るお母さんと、夢で見るお母さんと少しも違いませんから、お母さんと呼び掛けますのに少しも躊躇しません。もしも違いますならば、呼び掛けますのに躊躇するはずであります。夢の中では全く本当のお母さんと思ひ込んでおります。

でありますから、夢の中で見た限り、聞いた限りにおいては現実と少しも違います。その夢の中で見ますお母さんは物質でありましようか。心でありましようか。夢は寝ている時に浮かび上つた記憶であります。でありますから夢の中のお母さんは心であると言わねばなりません。すると心である夢の中の有様と現実とは、母と思うという点では違わないということになります。この事にどなたも御異存ないと思ひます。

もつとも夢の中には記憶の現れるものと想像で描くものとあります。私共は方々で精神的写真を撮つて参ります。日光などに参りますと、美しい日暮らしの門等を見ました時、家に帰りました後、はつきりと思ひ浮かべる事ができます。思ひ出した時には、意識されております。それが目が覚めております時には記憶と申しますが、ぐつすり寝込んでおります時には、それが夢であります。こう申しますと「どっこい、そう

は言えない。見た事も聞いた事もなかったものを夢で見る事があるではないか」と言う方がありますかと思  
います。

しかし何んですナ、変な言い方でありますけれども、記憶には覚えていない記憶と、忘れた記憶とがありま  
す。忘れた記憶などと申しますとおかしいように思われる方もあるかもしれませんが、事實はそうでありま  
す。どんなものでも記憶していないものが現れるという訳はありません。道を歩いております時に、チラと  
一度見た事で、はつきり覚えていないものでありましても、ちゃんと記憶として残っております。夢の中で  
種々と景色を見てそれが全く今までに見た事のない景色でありましても、その夢を構成しております材料は、  
みなやはり今までに記憶されたものであります。記憶がそのまま現れる事もありますが、想像が現れる事も  
あります。けれども、その想像でありましても、その材料はみな記憶されたものであります。

芸術家でありますシルレル (Johann Christoph Friedrich von Schiller 註 1759～1805) などは原理に  
従って小説を書きました。原理に従うと申しますのは、こういう人物がある時には、またこういう人物をも  
つてこなくてはいけないとか、こういう人物の着物は、こういうのがよいというように、理に従って努力し  
て考えて作るのであります。けれども、ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe 註 1749～1832) などは  
小説を書くこうとしますと、ある話の有様が空中にサツと現れます。すなわち心の舞台に種々と劇が現れ来り  
現れ去るのであります。それを一心に文章に書き現すのであります。それでふと気が付いて見た時には原稿  
が山のように書けているということであります。またある時、小説を一心に書いております最中、ふと我に  
帰ってしまいました。しかし、その次を書くこうと思つて、また一心にその現れ来り現れ去る所を書きました

が、後でその途中で我に帰ってしまつて中断された所を書き足そうと思いましたが、どうしても書けなかつたとのことであります。

また、ステイヴンソン (Robert Louis Balfour Stevenson 著 1850~94) という人は種々の原理に基づいて小説の筋書を作ります。それを寝る時に思つて寝ます。そしてやがてぐつすり寝込みますと、寝る時に考へていたその小説の有様がマザマザと見えてまいります。筋書の時にはこの人のネクタイはこういうようなのがよいというようなことは考へませんでしたのに、夢の中でははつきりとネクタイの模様まで見えるのであります。またベートーベン (Ludwig van Beethoven 著 1770~1827) やモーツアルト (Wolfgang Amadeus Mozart ネームマニア 1756~91) のような天才的な人は、ある音律が空中にサーツと現れるということでありませう。それも想像で普通思ふようなものでなくマザマザと空中に音を聞いて、それを一心に音符に書き表すのだそうであります。しかし、もちろんシルレルでありますも、ゲータでありますも、ステイヴンソンでありますも、ベートーベン、モーツアルトでありますも、皆これらのものは想像であります。

なおまた記憶でありまして、皆が皆、色彩を記憶して、夢や想像にそれが現れるものとは限りませぬ。心理学者が統計を取りましたその統計によりますと、人によつては色彩でありますと、比較的はつきり思ひ出す事ができるけれども、音の事はあまりはつきり思ひ出す事はできないという人があります。そういう人を視覚系の人と申します。また音の事でありますと、はつきり思ひ出せるけれども、色彩の事はどうもはつきり思ひ出せないという人があります。そういう人を聴覚系の人と申します。そのように視覚系の人、聴覚



系の人、嗅覚系の人、味覚系の人、触覚系の人というように分けることができます。でありますから、人によつて夢も違います。ペーターペンやモーツアルト等は聴覚系の人ということが出来ます。皆様の中には、私は夢の中で音の事を夢に見ます。波の音でありますとかドードーと落ちる瀧の音でありますとか、また種々の音楽でありますとか、そのように耳の世界の記憶の夢を見る」と言う方もあります。このように夢には種々あります。またその夢も、その人々によつて異なつた夢を見ます。しかし、その夢の中では見た限り、聞いた限りにおいては現実と少しも違います。夢は寝ている時に浮かび上つた心であります。でありますから夢の中のお母さんの顔や友達顔、日光の陽明門の光景等は皆心であると言わねばなりません。すると、その心である夢の中の有様と、現実とは違わないということになります。なお夢に就きまして、夢とはこのように現実と違わないということを、私の経験しました事実において少しお話ししたいと思ひます。

私は心理学を学びました。その当時種々夢の事を考えておりました。それで種々不思議な経験をいたしました。大変尾籠な話であります、ある日、夢の中で小便がしたくなりました。向こうを見ますと、珊瑚樹の垣根がありまして、その横に便所があります。小便がしたいものですからそこでしようと思ひましたがその時、私考えました。待てよ、もしこれが夢であると困るから、夢か夢でないか一つためしてみようと思ひました。それでもしも夢であるならば、珊瑚樹の葉を取つて引き裂いてみても抵抗を感じないはずだと思ひました。珊瑚樹の葉を一枚ちぎつてみますとちゃんと抵抗を感じます。またその葉を引き裂いてみますと、マザマザと手に抵抗を感じました。アア、これではもう夢ではないに違ひないと思ひました。そこでジャージャーとやつてしまいました。そういたしますと、やはり身が軽くなつて一種の痛快さを感じました。その



途端ハツと目が覚めました。「こいつはしまった」と思いまして床を撫でてみましたが、幸いに濡れていませんでした。そして小便のつまった感じがしました。それで今度は本当に便所に行つて小便をして参りました。そのように夢の中でもやはり抵抗を感じます。

またある時、夢の中で舟が二隻あるのを見ました。その舟に赤い色と、青い色とをはっきり認める事ができました。そこで考えました。ある心理学者は、「夢の中で色というものははっきり見る事はできない」と言っているが、今これは夢であるが、夢の中でもこんなにはっきり光の赤と青との色彩を見る事ができるではないかと思つたことがあります。また夢の中で機はたを織つている所を見ました。その時、私考えました。これは夢である。心であるから心を他に転ずれば、こんなものは消えてなくなつてしまふに相違ないと思ひまして、南無阿弥陀仏くと大声で申しますと、本当に何もなくなつてしまいました。一切無で時間を超越し、空間を超越した真如の世界でありました。やはりこの大宇宙も一切心でありますから、ある一つの方向に心を統一的に働かせますと、一切切皆消えてなくなつてしまいます。

夢は見た限り、聞いた限りにおいては現実と違いありません。私共夢を見ております時には十中八九までは夢であると思つておりません。ですから夢を見ております時は、見た限り、聞いた限りにおいては夢と現実とは少しも違いありません。サア、そこで夢は心であるということはどなたも御異存ないことと思ひます。けれども、夢の中では自分があつて、透き通つた明るみを隔てて向こうにお母さんの姿を認めるのであります。けれども、それは心であります。ですから現実ではこの笹本が自分の外にあるということ、有形である、色形であるというような理由で、この笹本が皆様の心でないということはできなくなつた訳であります。

す。それで皆様はこの笹本が皆様の心であると言い切ることは未だできませんでも、そう言われてみればこの笹本は皆様の外にあるけれども、色形であるけれども、それだけの理由で心でないとはいえない、という処までは漕ぎつけたことと思えます。それで次に今度は、それが正しく心だということを突きとめるために御同様考えてまいりとうございます。

どうか、私を見て頂きとうございます。この一場の光景を他日夢に見るといたしますと、これと同じものであるに相違ない。夢の事を考えまして、心はどんな形で現れるかということは今確めたのであります。しからば、他日夢として浮かび出るべき記憶はいつ何処でできるのでありましょうか。どうか私の方を見て頂きとうございます。皆様がそちらにあつて、透き通つた明るみを隔ててこちらに笹本がお見えになります。話だけを聞いておりますと、いつまで経つても空論になつてしまつて、事実を掴むことができせん。でありますから、今日は大変失礼な事を申ししますが、小学生になつて私がこちらを見て頂きとうございますと申しましたら、すぐこちらを見て頂きとうございます。「そんな事見なくても分かっている」とおっしゃる方はきつと分からない方であります。

こちらに笹本がありまして、その周囲にぼんやりした所まで皆様御覧になることができます。この記憶はいつ何処でできるのでありましょうか。どうか事実をしつかり掴んで頂きとうございます。いかがでしょうか。この笹本を見ております時に、将来記憶として現るべき笹本が今現在何処にできておられますか。その事を掴まなくてはいけません。皆様は私の姿形の記憶を生まれながらにして持つておられる訳ではありません。私をじつと見つめている刹那刹那に、他日夢となるべき記憶ができるのであります。私から眼を

離れた時できるのでありません。此処に見えているこの顔の他に、どこかそちらの方にその顔が見えているという事実ありません。なんですナ、皆様があつてこの透き通った明るみを隔てて、此処に笹本があります。この笹本を見ております時、将来記憶となるべき笹本が何処かそっちの方にあるのではない。たった一つ此処にあるのでありますナ。

そういたしますと、今現に見えているこの笹本と、その周囲にあるほんやりと見えているものそのまま心であり、記憶の真つ最初であると言わねばなりません。このまま心であつて、それが記憶として後に現れるものであります。もしもこの笹本の他に、そっちの方に心として後に現るべき笹本があるのでありますならば、夢で見る笹本は心であるが、現実で見る笹本は心でないということができるかも知れませんが、今この笹本を見ております時、将来記憶として現れる笹本が、この笹本を離れてそちらにある訳ではありません。全くこの笹本はたった一つ此処にあるだけであります。ですから、今現に見ております笹本は記憶の真つ最初である心であると言わねばなりません。

そういたしますと、私共の心はだいぶ大きくなりましたですナ。只今の所少なくともこの眼界は皆様の心であります。私共は身体と心とからできております。心の方から見ますと、かならずしも小我ではありません。しかし、心は頭の中にあると考えると考えれば小我であります。

私共は生まれてから今日まで種々のものを見たり聞いたりしてまいりました。それはその時その時の心であつたということになります。この意味でもって仏教では一切唯心と申します。もちろんこれは見た限り、聞いた限りにおいていうのであります。もちろん私はうすつぺらであります。中身があります。見えてい

でも見えていなくても在るものがあります。皆様は御自宅を離れて此処にいらつしやいましたが御自宅にも今何かあるに相違ない。そこには振動の世界があります。日光の瀧の音は今聞こえてはいますが、その音のする所には、毎秒八乃至十六回からおよそ五万回までの振動があります。その振動が耳に達すると音として聞こえる訳であります。今は聞こえてはいません。皆さんの御自宅には今見えてはおりませんが、そこには何かあります。

大脳の後頭葉中枢の神経細胞に刺激が達すると注意活動が呼び起こされて、その働きかくる先の所に物を見る。その刺激それは一秒時間に四百五十兆回から七百五十兆回までの振動であります。その刺激は御自宅としてある訳であります。此処に達してはおりませんが、あると言えます。お宅へお帰りになりますと、神経系統へ刺激が来て注意が呼び起こされて、お宅の種々のものが見えることになります。見えている限り、聞こえている限り、それは心であると今まで述べて来ましたが、現在見えていないものが多々ある。これは何かということにはまだ触れておりません。これは後程お話ししますが、物理学ではこれを一切振動であると申します。仏教では振動と言わないで「動搖」と申しております。これは阿頼耶識であります。

私共は認識の客と主とが別であると考えておりました。客は物質であつて、主は心であつて頭の中にあると思つておりました。心は色も形もないものであると思つておりましたが、今は何とお考えになりましたか。認識の主と客とがやはり別々にあるとお考えになりましたか。『解深密経』に、

無有少法能见少法。(少法の能く少法を見るもの有ること無し)

というのがあります。意味はちよつと「少」という字をどけておきまして考えますと「法のよく法を見るも

のあることなし」というのでありまして、前の法は認識の主ということであり、後の法は認識の客ということでもあります。それで全体の意味を申しますと、認識の主とか認識の客などというものは少しもないぞ、ということでもあります。有るものは心ばかりであるという意味であります。

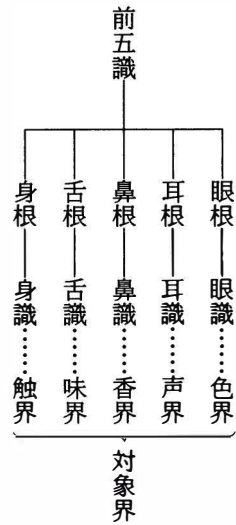
「ちょっと念のために申し上げます。記憶は普通の考えによりますと、頭の中に浮かぶ精神的写真であると考えていますが、しかし記憶は頭の中に浮かぶものではありません。頭痛の記憶は頭の中に浮かぶではありませんが、しかし森羅万象は自分の身体を離れて近く遠く、あなたこなたに分かれ位し、羅列して現れるものであります。

夢の事を考えますとすぐ分かります。透き通った明るみを隔てて自分を離れた彼方にお母さんを見ます。それは有形であります。記憶が頭の中にせせこまって浮かぶというのは空論であります。

そういたしますと、心とは何処にどのように現れるものかと申しますと、「心とは自分を中心としてあるいは内に、あるいは外に、あるいは近く、あるいは遠く、あなたこなたに分かれ位し、羅列して現れるもの」ということになります。

## 二 識に就いて

見えているもの、聞こえているものを精密に知るためには、前五識と第六識とを区別する必要があります。仏教では識を八識に分けて説明しております。実に精密でありまして、仏教の説明には痛快を感じます。けれども今までの所は前五識の心に就いて申したのであります。



第六識 ——— 意根 ——— 意識……法界

第七識 ——— 末那識 ——— 意そのものを指す。意根とはすなわち末那識

第八識 ——— 阿頼耶識 ——— 根、境、識等

第九識 ——— 菴摩羅識 ——— 真如 ——— 真如は一切の体

次に第六意識であります。意識は一般には広い意味で用いられております。意識もこれを精密に分けま  
すと、明了意識と不明意識との二つに分けることができます。意識は見覚えあらしむるものであります。  
明了意識と申しますと、前五識（眼識・耳識・鼻識・舌識・身識）と共に活動するものであります。あな  
たが私と会うといたします。その時「アア、これは笹本さんだ」というように識別する事のできますのは、  
この意識が働くからであります。この時、意識ははっきりしております。でありますから明了意識と名付け  
ております。

けれども友達顔を思いますとか、お母さんの顔を思いますとかいうような時、やはり友達顔、お母さ  
んの顔が見えます。けれどもほんやりしております。でありますから、これを不明意識と申します。また

対象があるのでありませんから、一人で思うのでありますから、これをまた独頭の意識とも申します。夢は不明瞭意識、すなわち独頭の意識でありまして、対象すなわち刺激（境）があつて、それによつて注意が喚起されて、注意の赴く先に物を見るというのではありません。もつともお母さんの顔を思い出しますにも、また私共が思惟するという事でありまして、もちろんそうあらしむべき原因があつて思うという事あらしめられるのであります。

私共がお母さんの事を思い出します時、その記憶があつて大脳皮質にある生理状態となつております。それが人とお母さんの話をしますとか、本を読むとかいうような刺激がありますと、お母さんの事を思い出しますのであります。私共がお母さんの顔を思い出しますにも、闇雲に突然思い出すのではありません。やはり思い出すには思い出すべき原因ともなるべき刺激があつて連想の法則に則つて思い出すのであります。そして、そのようにお母さんの顔を思い出します時、また夢にお母さんの顔を見ます時は、投象してその容姿を見るのであります。

一般に意識という言葉を用います時は大変広い意味で用いられておりますが、仏教でいう意識はもつと狭い意味でありまして、図で示してありますように意識を第六番目に数えて、眼識によつては色界を見、耳識によつては声界を知り、鼻識によつては香界を知り、舌識によつては味界を知り、身識によつては触界を知り、意識によつては（三昧の心が共動活動する時あり）法界を見るところに狭い意味に用いております。でありますから私共経文などを拝読いたします時、その文字がどういう意味で用いられているかをよく注意して読みませんと、その本当の意味を知る事できませんことになります。



このように眼、耳、鼻、舌、身等の対象の世界を各々色界、声界、香界、味界、触界等と名付けますように、意識の対象を法界と名付けます。この法界を見る眼という意味をもって五眼（肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼）のうちの法眼を法界を見る眼、法眼と名付けるのであります。もつとも、この法界というのは広意味でありまして、法眼によって見得らるるもの、また天眼等によって見得らるるものをも一切含んでおります。法眼によって見得らるるお浄土の差別は色の世界、振動の世界ではありません。でありますから常楽我浄であります。不滅常住のものであります。しかし、天眼によって見得らるる世界は違います。天眼によって見得らるる処はやはり色の世界であります。生死流転ということのある世界であります。お浄土は出世間の三昧によらなくては見奉ることできません。

次に末那識と申しますと自我観念であります。一般に意根と言われておりますのが末那識でありまして、自分と自分でない者とを区別するのがこの末那識であります。こいつが曲者なんです。この末那識が頑固に頑張っておりまして、私共はなかなか永遠の生命に気が付きません。

この事に就きまして種々事例を挙げてお話ししますとよいのでありますが、一つだけお話し申し上げます。

末那識は私共生きております間は脳皮質と密接に結び付いておりまして、なかなか離れません。しかし、私共が死にますと、この身体からもぬけ出ると申しております。また死にませんが、ある種の修行をいたしますと、この身体からもぬけ出る事ができます。もうだいたい以前の事ではありますが、私と私の友人と二人でお念仏をするために十日間ばかり伊豆の方に参った事があります。そのお別時中の出来事でありまして、

私の友人は一心にお念仏をしておりますが、如来様にお目に掛かりたいという願いをもってお念仏するのではなく、精神統一の道具としてお念仏しておったようであります。なにせ非常に早口で南無阿弥陀仏／＼とお念仏を申しております。ある日、やはり相変わらず大変早口でお念仏申しておられました。そしてお念仏を終わって後、私に話してくれました。

その友人がその日一心にお念仏を申しておりますと、自分がこの頭の額の所からスーツと抜け出して高くなり低くなりしながら、そして野を見、林を越え、川を越え、谷を越えて種々の景色を眺め、また高くなり低くなりしながらも来た所を通って帰って来て、またこの額の所からスーツと入ってしまった。こうなんです。それであまりにマザマザと景色を見たので夢を見たとも思われない。それでお念仏が終わって後、さつき自分もぬけ出して行った所を、今度はこの身体で行って見ました。そういたしますと、さつき自分もぬけ出して行って見た時と少しも違わない景色を、今度はこの目で見たということでもあります。そういたしますと、さつきお念仏中に自分もぬけ出して処々方々の景色を眺めたというのは、お念仏中に夢を見たというのとは大いに違います。本当に自分もぬけ出して行って処々方々の景色を見たのであると言わねばなりません。

このように末那識は死にませんが、ある特殊な精神統一をやりますと、この身体からもぬけ出す事ができます。しかし、死ねば私共はこの身体からもぬけ出ると経文に説かれてあります。

なおこの末那識に就きまして種々例を挙げてお話し申しますとよいのでありますが、只今は省略いたします。

次に阿頼耶識と申しますと「蔵識」ということでありまして、一切の記憶が蔵されている所であります。ヒマラヤ山と申しますのは、ヒマアラヤということでありまして、「ヒマ」とは雪という意味であります。「アラヤ」と申しますのは、蔵という意味であります。それで雪を蔵する所という意味をもつてヒマラヤ山と名付けられたと申します。そのようにアラヤとは蔵ということでありまして、阿頼耶識は一切の記憶を蔵して、私共の心のどん底に無始以来の暗流として流れていると申します。

私共は生れてから今日まで種々のものを記憶してまいりました。それだけでありまして実に無数ということが出来ます。記憶は思い出されております時には意識であります。しかし、思い出されていない時は記憶は意識ではありません。それでは思い出されていない時の記憶は何かと申しますと、仏教では阿頼耶識として保存されていると申します。阿頼耶識はまた記憶を蔵しているというだけではありません。一切の心はこの阿頼耶識から現れてまいります。皆さんに見えているこの笹本は皆さんのお心でありますと申し述べて来ましたが、この心は原因なくしてはできません。この見えている心あらしむべき原因も、やはりこれを阿頼耶識と申しております。阿頼耶識には種々ありまして「瑜伽論」などを拝見いたしますと、実に精密に説かれております。例えば『瑜伽論』に阿頼耶識は共分別ぐんべんべつと不共分別の二つに分けねばならないというように精密に説かれております。

共分別と申しますと神経線維のことです。顕微鏡で見れば見る事のできるものであります。不共分別と申しますのは、この神経線維に伝流するものでありまして、ちょうど電気が電線を伝わって流れますように、電線に譬えらるべき神経線維に伝流するものであります、この伝流の伝は「つたわる」という字、「伝」

を用います。伝流するものでありますから、共通のものでありません。それで不共分別と申します。電線に譬えらるべき神経線維の方は共通のものでありますから共分別と申します。本当の心の根底となるものは、この不共分別の方であります。

また阿頼耶識を説明いたしますのに見分・相分・自証分・証自証分というように分けて観察しております。「見分」と申しますと認めるものという方の側からこれを見分と申します。「相分」と申しますと、認められるものという側から見てこれを相分と申します。けれども、これは認めるもの、認められるものと言いますが、二つ別にある訳でない。一つものであるという側から、これを自証分と申します。

またこの「自証分」というものがあるということをお覚させるのは、その根底に証自証分があるからであるという所から、これを「証自証分」と申します。このように「瑜伽論」などを拝見いたしますと、あらゆる阿頼耶識を実に精密に説明しております。仏教の説明には痛快を感じます。

終いに菴摩羅識は真如のことで、真如は一切の体であつて、いつでも何処でも同じものであります。前五識及び第六意識、末那識、阿頼耶識は色しほ、すなわち波であり、この体が真如で水に譬えられます。

阿頼耶識は刹那生滅、相似相統するものでありまして不滅のものではありません。色であります。「解深密經」に「阿頼耶識に就いては人が靈魂と間違えるから、如来様はお説きにならなかつた」と言つてあります。そういたしますと、識の説明はこれ位にいたしまして、次に進みたいと思ひます。先日来、今日まで段々御同様に考へて参りました処は、九つの識のうちの前五識の心に就いてお話し申したのであります。すなわち見えた限り、聞こえた限りにおいては、それら森羅万象は悉くその時、その時の心であつたと御同様に考へ

てまいった訳であります。

それで「心とは自分を中心として、あるいは内に、あるいは外に、あるいは近く、あるいは遠く、あなたこなたに分かれ位し、羅列して現れるもの」だと申し上げましたが、それは御了解下さいましたこととして、次に進みたいと思います。